

「日本英語教育学会第45回年次研究集会」@早稲田大学
研究集会テーマ:外国語学習の言語学的基盤
2015年3月7日土曜日・3月8日日曜日

国際バカロレアの教育効果に関する研究 —評価指標の設定に着目して—

千葉大学 大学評価部門

御手洗 明佳(教育社会学／特任研究員)

アウトライン

1. 本発表の目的
2. 背景
3. 先行研究の検討
4. 課題の設定
5. 分析
6. 分析の結果
7. まとめ
8. 参考文献

本発表の目的

- ✓国際バカロレア(以下、IBとする)の教育効果を検証するための理論的整理をおこなう。
- ✓教育効果研究の調査に先立ち、IBの「理念・目的」の分析を行い、IBが何のための教育プログラムを生徒へ提供しているのか、明らかにする。

背景: **IB**を推進する政策等

- ✓ 日本再興戦略-JAPAN is BACK-(H25.6 閣議決定)
- ✓ 日本経済団体連合会 (H25.6)「世界を舞台に活躍できる人づくりのために」ーグローバル人材の育成に向けたフォローアップ提言ー
- ✓ 教育再生実行会議 第四次提言 (H25.10)「高等学校教育と大学教育との接続・大学入学者選抜の在り方について」
- ✓ 中央教育審議会 高大接続特別部会 審議経過報告 (H26.3)

背景: **IB**を推進する政策等

例1) IBスクールの増加

日本再興戦略 -JAPAN is BACK-

「一部日本語による国際バカロレア の教育プログラムの開発・導入等を通じ、国際バカロレア認定校等の大幅な増加を目指す(2018年までに 200校)。」

例2) 大学入試での積極的な活用

教育再生実行会議 第四次提言

「大学は、入学者選抜において国際バカロレア資格及びその成績の積極的な活用を図る。国は、そのために必要な支援を行うとともに、各大学の判断による活用を促進する。」

背景：国際的に高い評価

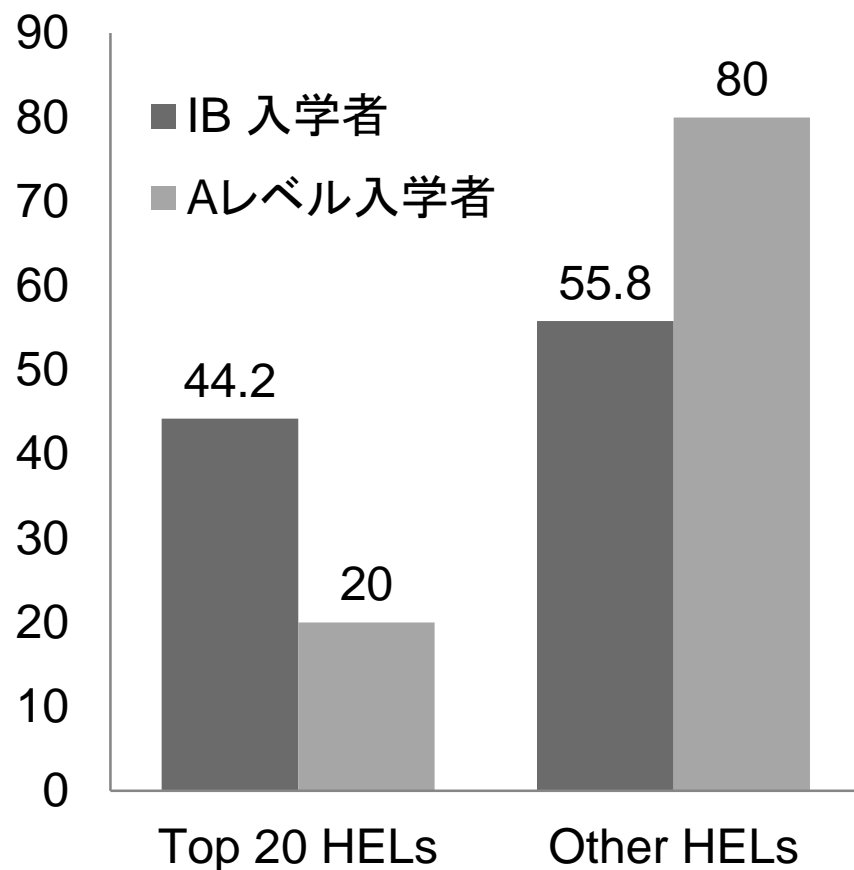
「(略)...国際バカロレアは、基礎・基本的な知識・技能に加え、「主体的に学び考える力」を育成する上で有益なプログラムとして国際的に評価されており、大学入学者選抜において、国際バカロレア資格やその成績を活用する取組も推進すべきである。」

中央教育審議会 高大接続特別部会 審議経過報告 (H26.3)

背景: TOP20大学(英国)への高い進学率

IB-DP取得者の傾向

- ✓IB-DP取得者は、英国主要大学Top20への進学率が高い。
- ✓大学卒業後、Top20大学へ進学する傾向にある。
- ✓大学院レベルの職業(高い給与)へ就いている割合が高い。



参考：英国**TOP20** 大学

Oxford, Cambridge,

Warwick,

St. Andrews,

University College London,

Lancaster, Imperial College,

London School of Economics, Loughborough,

York, SOAS, Laicester,

Bath, Exeter, Edinburgh, Sussex,

Durham, Southampton,

UEA, Surry

背景: SAT/ACT(米)の高い試験結果

SAT及びACTの平均点は、各科目とも、IB-DP生の方が、
米国学生全体の平均より高い。

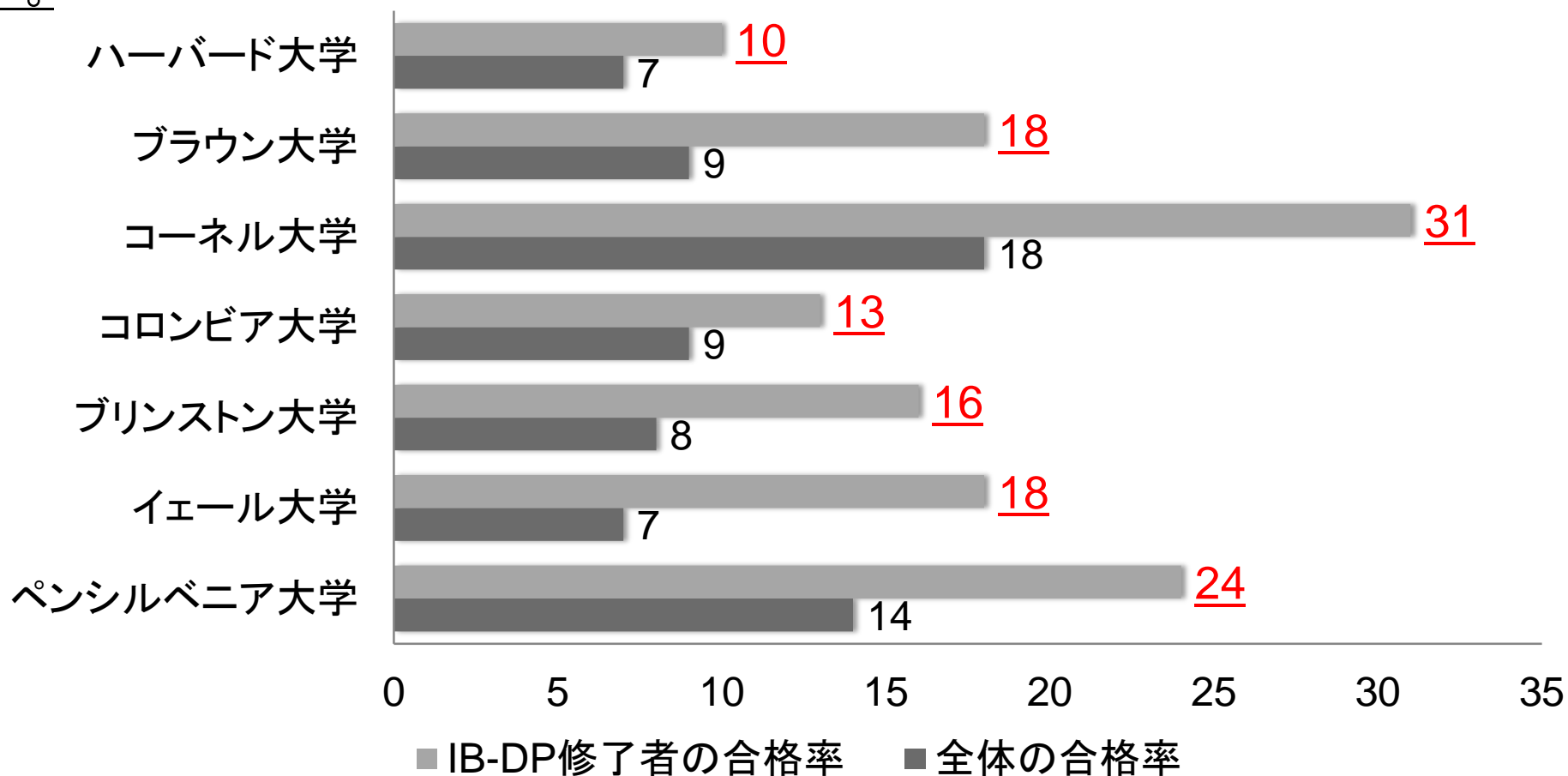
テスト	米国全体の平均点	IB-DP修了生の平均点	サンプル数
SAT	1,500	1,953	2,150
Math	514	654	2,172
Verbal	497	649	2,162
Writing	486	649	2,161
ACT	21	29	1,190
English	21	29	1,190
Math	21	29	1,184
Reading	21	30	1,181
Science	21	28	1,177

参考:“The IB diploma programme: graduate destinations survey 2011 Country report United States of America” by International Graduate Insight Group , MEXT. (2014).



背景: 米国アイビー・リーグへの合格率(%)

IB-DP取得者のアイビー・リーグ合格率は、全体の合格率より3~13%ポイント高い。



背景: **IB**の政策を支えるエビデンス

- ✓ 英国TOP20大学(大学院)への高い進学率
- ✓ SAT及びACT(大学進学適正試験)の高得点取得率
- ✓ アイビー・リーグへの高い進学率

つまり、国際的な評価とは、有名大学(世界ランキング上位校)への高い進学率

疑問

✓有名大学(世界ランキング上位校)への高い進学率は、良い教育プログラムを説明する要因になるのか。

✓よい教育プログラム＝教育効果の高い教育プログラム

教育効果に関する先行研究の検討

- ✓ 教育効果研究は、結果的に「学校効果研究 (School effectiveness Research)」に帰結している。
- ✓ これまでの教育効果研究は、「**学力／資格の到達度**」を指標として「社会的な不平等の是正」を目的として進められきた。
- ✓ 「**学力／資格**」が何を意味しているのかは、検証されていない。

Coleman et al 1966, Illich 1971, Klitgaard & Hall 1974, Sammons 1996, 志水 2009 など

教育効果研究の抱える課題

‘多くの国で教育水準が上昇している一方、教育的不平等は未だ解消されてはおらず、また投票率や一般的な市民参加に対して、共通の問題を抱えているといえる。’

OECD教育革新センター, 2007

✓教育効果を測定する指標(=「ものさし」、すなわち、学力／資格)そのものを問い直す必要性がある。

課題の設定

1. 国際バカロレアディプロマプログラム（以下、IB-DP）とは、大学への接続を想定した教育プログラムになっているのか。
2. また、IB-DPは日本の大学へ接続する中等教育プログラムとして有効なのか。

本研究の分析枠組みと本発表の位置づけ

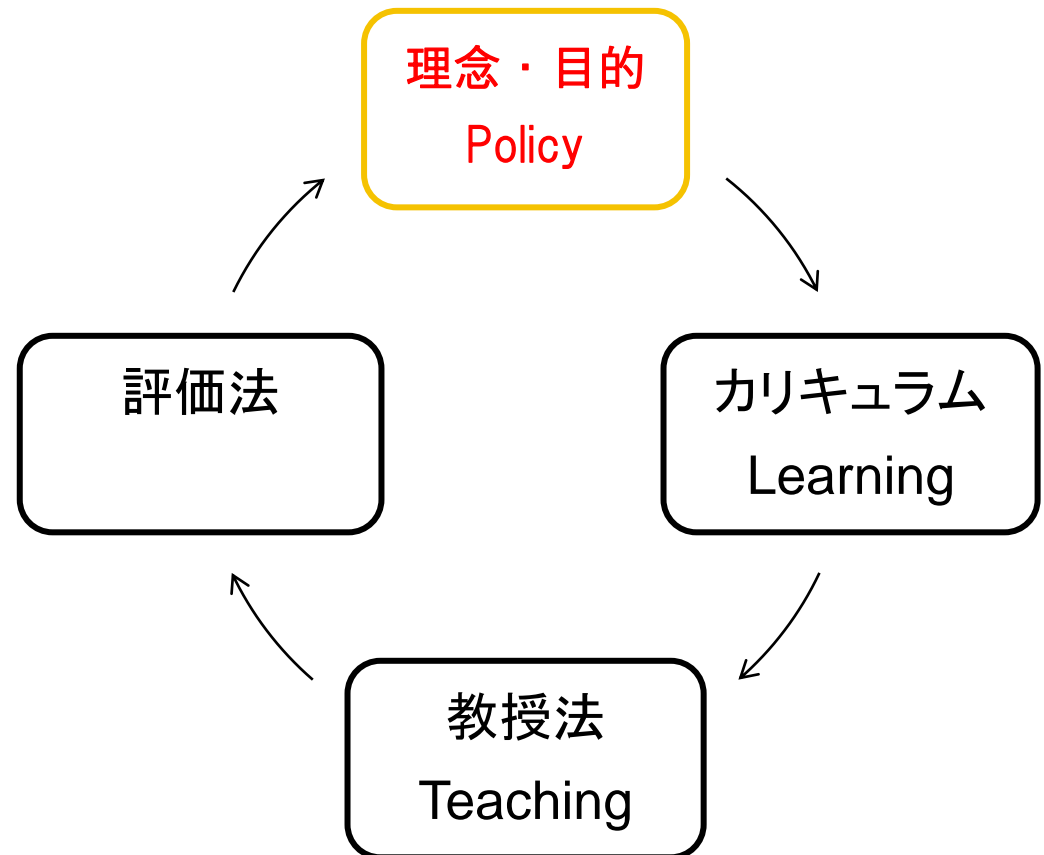
IB教育プログラムの分析

1)理念・目的

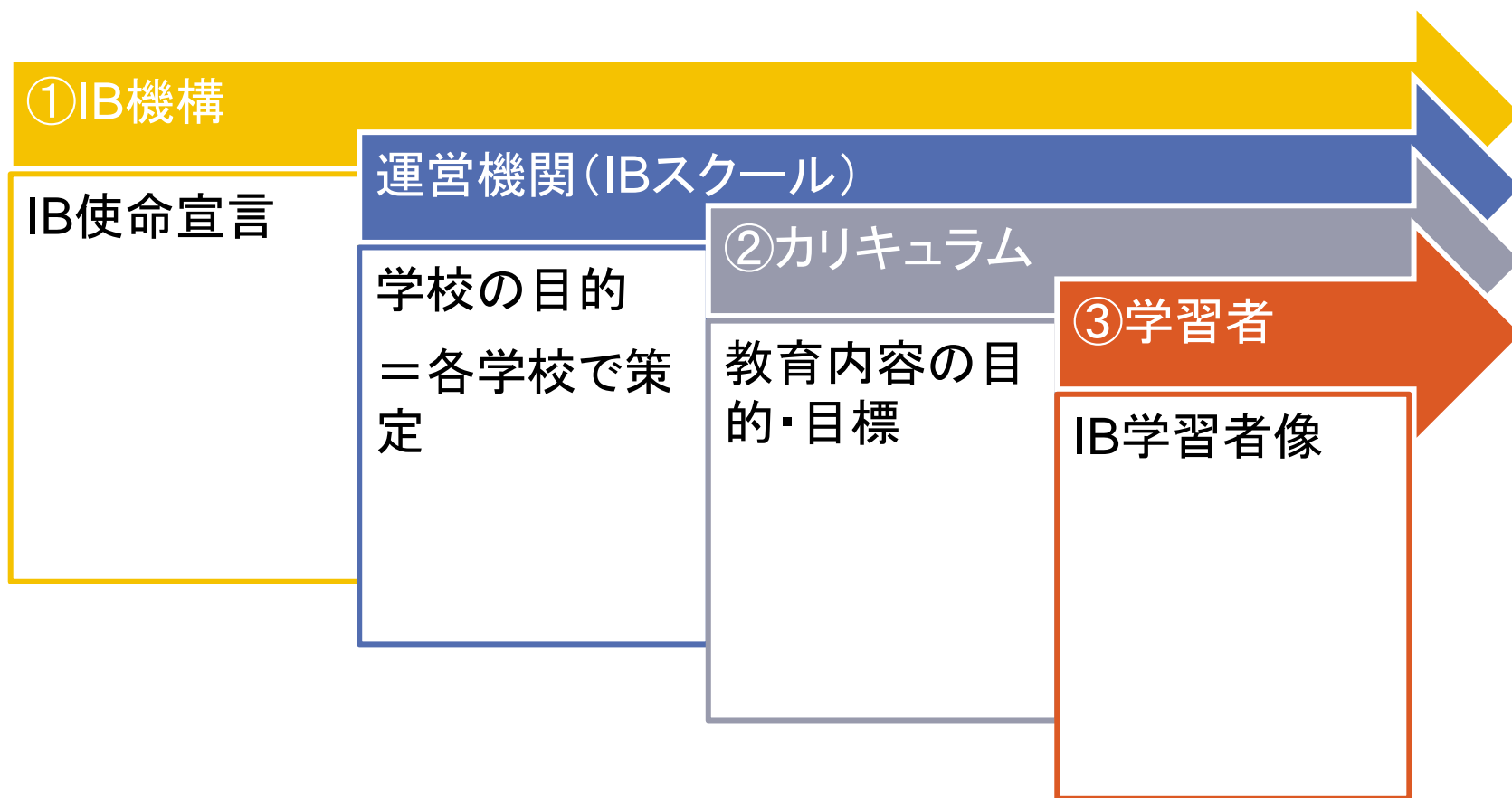
2)教育課程の内容

3)教授法

4)評価法



分析材料: 理念・目標の分類



本発表では、①、②、③の三点の分析をおこなう。

①IB機構 理念

【IB Mission Statement (IB使命宣言)】

‘国際バカロレア機構の目的は、異文化の理解と尊重を通じて、よりよい、より平和な世界を構築できる、向学心と知性に富んだ、思いやりのある若者を育むことにある。’

K.W. 異文化理解・平和な世界の構築・若者の教育

= 平和な世界を構築するための異文化理解教育

②DPカリキュラムの目標

グループ名	科目別
1. 言語と文学	言語A: 文学、言語と文学、文学と演劇
2. 言語習得	言語B(標準レベルおよび上級レベル)
3. 個人と社会	ビジネス:経営、、地理、歴史、情報テクノロジーとグローバル社会、哲学、心理学、社会・文化人類学、世界の宗教(標準レベルのみ)、グローバル政治
4. 実験科学	生物、コンピューター科学、化学、デザインテクノロジー、物理、スポーツ・エクササイズ・健康科学(標準レベルのみ)
5. 数学とコンピュータ科学	数学スタディーズ(標準レベル)、数学(標準レベル)、数学(上級レベル)、数学(最上級レベル)
6. 芸術	ダンス、音楽、フィルム、演劇、ビジュアル・アート

上記に加え、コア科目としてTOK、EE、CASがある。

MEXT, 2014より引用

②DPカリキュラムの目標の分析

グループ名	
1. 言語と文学	母語を通じた文化間の比較
2. 言語習得	①多様な文化でのコミュニケーション能力の育成 ②異なる社会や文化の人々の架け橋となる能力の育成
3. 個人と社会	人間性、人間が下した判断、人間が関わる出来事を文脈的に理解
4. 実験科学	①科学技術を政治、宗教、国籍を超えた開かれた批判的探求であると理解 ②重要で国際的な努力であると理解
5. 数学とコンピュータ科学	①数学が世界の共通言語であることを理解 ②世界のさまざまな文明の中に数学の起源を発見する
6. 芸術	①自分の文化と他の文化の文脈で芸術を探求する ②文化的美的相違を尊重し、理解する ③批判的思考、課題解決力の育成

②DPカリキュラムの目標の 分析

コア科目	
知の理論 (TOK)	①多文化的なものの方
課題論文 (EE)	②従来型の教室での授業の枠をこえた経験的な学習についての振り返りと考察
創造性・活動・奉仕 (CAS)	

カリキュラム目標の分析結果①

分析結果

理解する事柄と育成するスキルに分類された

✓生徒がカリキュラムで理解する事柄

- 言語・非言語の理解
- 歴史的、地域的文脈からみた人間性(思考・判断・表現)の理解
- 国際的な努力としての科学技術

カリキュラムの目標の分析結果

✓生徒がカリキュラムで育成する能力

- コミュニケーション能力
- 比較能力
- 批判的思考(クリティカル・シンキング)・探求
- 課題解決能力
- 多文化的なものの方
- 振り返り
- 考察する能力

③学習者像

The IB Learner Profile



- 1) 探究する人
- 2) 知識のある人
- 3) 考える人
- 4) コミュニケーションができる人
- 5) 信念のある人
- 6) 心を開く人
- 7) 思いやりのある人
- 8) 挑戦する人
- 9) バランスのとれた人
- 10) 振り返りができる人

③学習者像の分析結果

知識・理解	スキル
地域に関する知識	探究・調査スキル
地球規模の問題に関する知識	自己学習能力
自国の文化や歴史に関する知識	批判的思考力
知・情・体に関する知識	創造的思考力
自己理解に関する知識	コミュニケーション能力(言語・非言語)
地域社会の伝統・価値観・視点に関する知識	倫理的推論
	評価能力
	振り返り

6. 分析の結果

✓IBの理念・目標

- 異文化理解教育を通じた若者の育成

✓カリキュラムの目標

- 知識・理解は、異文化理解に関する事柄
- スキルは、転移可能性がある能力(ジェネリック・スキル)

7. まとめ

✓IBの教育プログラム／資格の「理念・目標」に掲げられる内容は、「異文化理解教育」に関連するものであり、高等教育で学ぶ内容に依拠した内容であるとは言い難い。

✓しかし、目標に散見されたスキル(涵養すべき能力)は、日本の学士力、イギリスのジェネリック・スキル、アメリカのVALUE(学士課程教育における妥当な学習評価)プロジェクト等※、高等教育で涵養が求められる能力である。

※参考資料参照

7. まとめ: 課題への回答

1. IB-DPとは、大学への接続を想定した教育プログラムになっているのか。

→IB-DP教育プログラムは、基礎として『スキル』を根底に置き作成されている。よって、スキルベースである西欧型の大学の教育プログラムに接続しやすい教育プログラムといえる。

参考: AAC&U 「VALUEプロジェクト」

AAC&U (American Association of Colleges & Universities: アメリカ大学・カレッジ協会)

= 1915年設立

= 教養教育の質や公共的役割の向上を目的とする組織

= 1250の加盟校によって構成

VALUE (学士課程教育における妥当な学習評価)
プロジェクト: 2007-2010年

参考:プロジェクト長 ローズ (RHODES, T.)

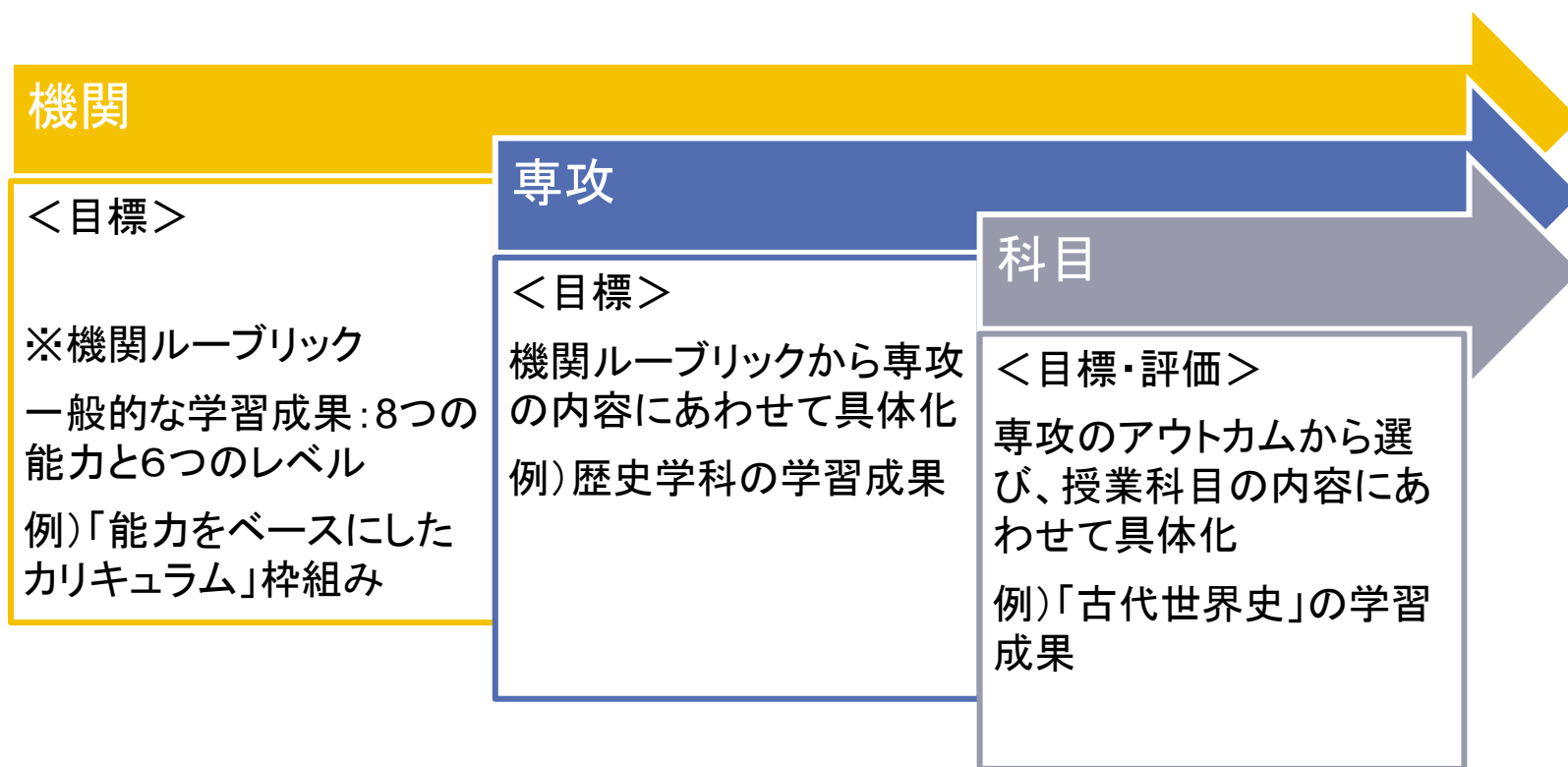
VALUEルーブリックは、大学や教員が特定の学位レベル—準学士号と学士—の達成に対して期待されるパフォーマンスの質を評価するために、共通のスタンダードを創り出す手段を提供している。つまり、そこにあるのは、標準化に陥らない、質についてのスタンダードの枠組み

(Rhodes,2011,p.4)

参考: VALUEルーブリック(メタ・ルーブリック)

知的・実践的スキル	探究と分析	個人的・社会的責任	市民参加
	批判的思考		異文化知識・能力
	創造的思考		
	文章コミュニケーション		倫理的・推論
	口頭コミュニケーション		
	読解		生涯学習の基礎とスキル
	量的リテラシー		
	情報リテラシー	統合的・応用的学習	統合的学習
	チームワーク		
	問題解決		

参考：米)大学、アルヴァーノ・カレッジ



(出典)松下佳代、2012「パフォーマンス評価による学習の質の評価－学習評価の構図にもとづいて－」『京都大学高等教育研究第18号』p.87

参考: 8つの能力をベースにしたカリキュラム

- ✓ コミュニケーション
- ✓ 分析
- ✓ 問題解決
- ✓ 意思決定における価値判断
- ✓ 社会的インタラクション
- ✓ グローバルな視野の発達
- ✓ 効果的な市民参加
- ✓ 美的な関わり

(Loacker & Rogers, 2005)

7. まとめ: 課題への回答

2. また、IB-DPは日本の大学へ接続する中等教育プログラムとして有効なのか。

→日本の大学でも、「学士力」※としてスキルの涵養が教育課程の内容として組み込まれており、IB-DP教育プログラムとの接続は可能である。しかし、各大学の教育課程の中でいかにスキルベースの教育が実施されているのか教授方法と成果が検証されているとはいえない。今後、更なる分析が課題といえる。

※次頁資料参照

参考：学士力（日本）

✓ 学士力に関する主な内容

1. 知識・理解（文化，社会，自然 等）
2. 汎用的技能（コミュニケーションスキル，数量的スキル，問題解決能力等）
3. 態度・志向性（自己管理力，チームワーク，倫理観，社会的責任等）
4. 総合的な学習経験と創造的思考力

MEXT, 2008, 「学士課程の構築に向けて（答申）」中央教育審議会

ありがとうございました

s-mitarai@chiba-u.jp

参考文献

1. Coleman, J. S., Campbell, E. Q., Hobson, C. J., McPartland, J., Mood, A. M., Weinfeld, F. D., & York, R. (1966). Equality of educational opportunity. *Washington, dc*, 1066-5684.
2. MEXT. (2014). 『国際バカロレア日本アドバイザー委員会報告書 参考資料集』
3. OECD教育研究革新センター編著 2008 『学習の社会的成果—健康、市民、社会的関与と社会関係資本』 明石書店
4. Justin Sanders, 2013, ‘Research on the Impact of IB Education ’ Tamagawa University Global Education Forum’
5. International Graduate Insight Group “The IB diploma programme: graduate destinations survey 2011 Country report United States of America”
6. The Higher Education Statistics Agency (HESA), (2011)<https://www.hesa.ac.uk/stats> (閲覧日 2015,3,5)
7. Illich, I. (1971). *Deschooling society*. *New York*, 56.